

日本皇室の存続について

——戦後の研究紹介を中心に——

美 和 信 夫

目 次

はじめに

1. 日本皇室の存続に関する研究の重要性
2. 日本皇室の存続理由
 - (1) 民族的・地理的・風土的理由
 - (2) 皇室を中心とした日本国家成立期の事情
 - (3) 日本史上における皇室の性格
 - (4) 日本人の国民性の特質
 - (5) 日本の社会構造の特質
3. 日本皇室の本質的な存続理由

はじめに

日本の皇室は、二千年近く一系世襲として存続している。それも血のつながりがあるというだけではなく、天皇家として一定の地位を保ちながら存続しているのである。

それは、単なる偶然ではなく、存続すべきそれなりの理由があるに違いない。その理由を究明していくことは、重要な研究課題であると考えている。

ところで、第二次世界大戦前においては、この問題を正面から探求しようとする学者はほとんどいなかったように思われる。たとえば、戦前戦後を通じ歴史学者として活躍し、戦後天皇に関するいくつかの著書を公刊した肥後和男氏は、戦前における日本皇室研究の動向を、戦後になって次のように述べている。

この問題（日本皇室存続の理由）は従来誰もしっかりと探求しなかったからなのです。御承知の通り、今度の敗戦まで、天皇は日本最大のタブーであって、あれこれ批判したり分析したりすることを許されなかったのです。それはひたすらに仰いで信ずべきもので、その存在の理由を学問的に探求するようなことは、とんでもない不敬とされました。したがって誰もがこれを取扱いませんでした。⁽¹⁾

ところが、昭和初年に『道徳科学の論文』を公刊し、新科学モラロジー（道徳科学）を提唱した法学博士広池千九郎氏は、明治30年頃より、日本皇室存続の理由を究明することを重要な研究課題と考え、その問題にも取りこんでいた。すなわち、広池氏は、『道徳科学の論文』の中で、明治30年頃に国学者井上頼因氏より、「日本皇室は何故万世一系か」という問題を究明することの重要性を示唆されて、その問題の研究を思い立ったこと、それが後年のモラロジー研究の一つの大きな動機・理由にもなったことを述べている。⁽²⁾

そして広池氏は、『道徳科学の論文』の中で、日本皇室存続の理由として次の四点をあげていると考えられる。

- ① 皇祖神天照大神にみられる道徳性がすぐれていること。⁽⁴⁾
- ② ①を継承し、歴代の天皇もまた道徳性にすぐれ、しかもそれが累積されてきたこと。⁽⁵⁾
- ③ 君民同祖の思想など、日本人の国民性（民族精神）によること。⁽⁶⁾
- ④ 皇室が日本国家の統一・秩序・平和及び国民幸福実現の基礎をなすという日本の社会構造によること。⁽⁷⁾

なお広池氏は、上記四つの中でも①と②の理由を重視している。また④という皇室を中心とする日本の政治・社会組織が、①と②をもとにして成り立

ち③によって支えられ、③でいう日本人の国民性もまた主として①と②によって形成されたとしている。⁽⁸⁾したがって広池氏は、国家成立以来日本の皇室に継承されているすぐれた道徳性こそが皇室の本質であり、それが皇室存続の最も重要な理由とみていると考えられる。

戦後になって、日本皇室の存続の問題は、諸学者が取りあげるようになった。そこで本稿は、歴史学者を中心に、この問題に関する戦後の諸学者の見解を要約して紹介し、今後の研究をすすめるための視点をつかむとともに、戦前の広池氏の研究の現代的意義を考察することを目的としている。

1. 日本皇室の存続に関する研究の重要性

戦後になって、日本中世史専攻の豊田武氏が、「西暦紀元前後、大和に起ったわが天皇制が、その後二千年の長きにわたって、伝統的な権威を維持したことは、冷静な学問的立場より見ても、確かに世界史上の奇跡だといわねばならない。」⁽⁹⁾と述べているように、二千年近い間、天皇が日本の中心として存続したという事実は、世界史上極めて注目すべきことである。そこで戦後多くの学者が、それには理由があって決して偶然ではないことと、この重大な問題を究明していく必要性とを説いている。たとえば、日本古代史の大家である坂本太郎氏は、日本歴史の特性の第一が皇統の連綿性という事実であるとして、次のように述べている。

皇統がこのように連綿性を保っているのは、どういう理由に基づくか、これはわたくしどもの大いに検討しなければならないことであると思うのであります。著名な日本研究家サンソム氏の近作の『日本史』を見ましても、その点を強調しておりまして、この点の究明が日本研究上必要であると言っておるのであります。⁽¹⁰⁾

そして近年においては、現在の象徴天皇制とのかかわりの上からも、特に統治権能を事実上喪失した歴史段階の天皇、すなわち武家時代の天皇が何故存続したのかについての研究関心も高まっている。たとえば、日本法制史家石井紫郎氏は、すでに20年も前に次のように述べ、武家時代の天皇の存続問

題を重要視した。

「万世一系」の天皇制が二千年の長きにわたって生き続けて来たのは何故か、特にその「権威」が最も失墜したといわれる中世後期を生きることができたのは何故か、この問題は日本社会の究明を志すものにとって wertfrei に問わるべき事柄であり、……。⁽⁴³⁾

以上の如く、広池氏が抱いた日本皇室の存続に関する問題の重要性は、戦後の学界において広く認識されるようになったのである。

2. 日本皇室の存続理由

日本の皇室は、恐らく一つ二つの理由ではなく、さまざまな理由が重なって、二千年近く存続しているに相違ない。

戦後になって、前節でみたような問題意識をもとに、日本史家を中心に、種々の存続理由が指摘されている。筆者の管見の及んだ範囲で、それら諸見解を整理してみると、次の五つの方面から存続理由が指摘されていると思われる。

- (1) 民族的・地理的・風土的理由
- (2) 皇室を中心とした日本国家成立期の事情
- (3) その後の日本史上における皇室の性格
- (4) 日本人の国民性の特質
- (5) 日本の社会構造の特質

そこで本節では、日本皇室の存続理由に関する従来の見解を、上記五つの方面から紹介していくことにする。その場合、まず理由をあげ、次にその理由に関する従来の見解を要約しながら紹介し、最後に諸見解の中で代表的見解と思われるものの一部を引用するという体裁をとることとする。

(1) 民族的・地理的・風土的理由

まず第一に、日本人の民族的特質、日本の地理的・風土的特質などの面から、日本皇室の存続理由を紹介しよう。

日本がアジア大陸の東端に位置する島国であったために、他民族の征服・支配を受けることがなかった点など、日本・日本人の置かれたこれらの諸条件は、日本皇室の存続にとっても大きな要因になっているものと考えられる。

① 日本民族の単純性⁽⁴⁴⁾

現代の有力学説によれば、現代日本人の祖先は縄文文化時代からこの国に住み、日本民族を形成してきたという。それ以来今日に至るまで、日本人は比較的民族性が単純であり、日本国家成立後もいわゆる単一民族単一国家の体制をなしてきた。

そのため、言語・宗教（神道）など古代社会以来同一の文化を、日本民族全体で共通して継承してきた。それが古代以来の天皇が存続する一要因といわれている。たとえば、日本史家水戸部正男氏は、この点を次のように述べている。

そうすると日本人は人種としては比較的単純であるということになるであろう。日本語の起源もまた古いといわれているが、この列島ではどこでも日本語が通じ、これと対立するような言語はかつて一部の地方には存在しても、日本語による同化は早く進んだ。民族と言語が比較的単純であったということは、やはり君主制存続の一要素と考えられるのである。⁽⁴⁴⁾

② 日本が島国であること⁽⁴⁵⁾

日本列島は、人間が往来し、文化が流入しえないほど孤立した島ではなかった。しかし、大陸から適当な距離をもつ島国であったために、他民族の征服・支配をうけることがなかった。それが古代以来の独自の天皇という君主制を存続させる大きな要因になったといわれる。

世界史上をみても、民族と民族とが地理的に相接した場合、王朝の交代なしにすませることはほとんど不可能のようである。たとえば、西洋史家林健太郎氏は、日本の天皇制を世界の君主制と比較して論じた中で、この点を次のように述べている。

もう一つは、他国に征服されたことがないということ、これも大事なことです。

ヨーロッパ大陸の諸国のように国が隣接していれば、どうしても国家間の緊張関係が強くなる。となると、国王自身が強大な軍事力をもって自ら政治を指揮しなければならぬことも生じるでしょうし、また戦争に負けて、その結果、王朝がたおれるということも起こりやすくなるわけです。

日本はその点幸いに島国で、外国との関係が少なかったし、侵略される危険もなかった。したがって皇室というものが長い間、国民の中に強い基礎をもっていましたから、今度の第二次世界大戦で負けても、かえって天皇を中心に国の再生をはかろうという国民の気持が強く、外国側も皇室を廃止しようとしなかったところに、日本の独特なものが表われております。¹⁰⁹

なお、この島国という条件は、(1)の①の点を生ずる要素ともなった。¹¹⁰

③ 農耕生活の継承など日本の風土的要素¹¹¹

日本は山島からなっており、気候も比較的温和で、酷烈な自然ではない。また日本人は弥生時代以来稲作を中心とする農業民族でもある。

こうした日本の風土は、大陸遊牧民のような強大な専制君主の成立・攻防には適さないし、また極端なことを好まず、家父長的・平和的・持続的・安定的傾向を好む国民性をつくった。この点も、国民全体の大宗家とされて、祭祀を中心とする皇室が永続する要因になったといわれる。たとえば、肥後和男氏は、この点を次のように述べている。

たしかに日本民族が原始時代から農業生産によって生活してきた事実が、天皇を成立せしめ持続せしめたことに、深い関係をもっていることは否定し得ないであろう。……まず考えられることは農業が家族の協力によって行われ、そのためにそれを統一するものとして家父長の地位を鞏固にすることである。そして社会構造においては、部分と全体とはしばしば同一の原理において構成されることから、農業社会における単

位的構造である家父長的位置が、国家の君主にまで適用されることである。……。

しかも農耕生産は年年同じ作業過程をくりかえすことから、そこに持続の観念が養われる。これは日本の気候が四季をくりかえすこととも併行して、人々をして生活の無限なる持続を観念せしむる機縁となった。それはやがて社会制度そのものについてもそれを恒久化させることになった。一旦定められたものはそのまま永続すべきであるとの思想はここに成立する。それをわれわれは日本文化の各方面について見ることができる。……。

なおいえば農民はすべて安定を欲する。来年も今年と同様な自然的条件がくりかえされることを予期し、それに基づいてその作業に着手する。それと同様に現在の秩序がなお明年も持続することを当然とする。それとちがったものが出現することによってその精神が擾乱されることを好まない。そこに制度の持続性がある。¹¹²

(2) 皇室を中心とした日本国家成立期の事情

つぎに、皇室を中心とした日本民族の統一時、日本国家の成立期の事情から、日本皇室の存続理由を紹介しよう。¹¹³

今から二千年近くも前に、皇室の祖先を中心にして、初めて日本民族が統一され、日本国家が成立した。それ以来今日に至る迄、皇室を中心に日本国家の統一と秩序が維持されてきた。そこで、古代以来皇室が独特の権威をもって存続しているのは、津田左右吉氏が指摘しているように、そもそも皇室を中心にして初めて日本国家が成立した時の事情に、一つのカギがあると考えられる。いずれの事業においても、いわゆる創業期のあり方は、その後もその事業の伝統となって、その性格を規定していくことが多いものと考えられる。

① 日本皇室の祖先を中心に初めて日本民族が統一されたこと¹¹⁴

現在の通説によれば、皇室の祖先を中心に初めて日本民族の統一が実現

し、同一の民族・言語・文化に基づく日本国家が成立したといわれている。つまり皇室の前には、日本民族統一の君主は存在しなかったというのである。しかも、皇室は日本民族の内部から起こって周囲を帰服していったこと、また皇室を中心とした民族の統一は、時には軍事的行動を必要としたであろうが、概して宗教的、呪術的権威によって服従させる平和的な仕方で行なわれたことなども指摘されている。

このような理由により、最初の日本民族統一者の子孫としての天皇家の世襲が、特別な地位として国民一般から無理なく承認されていったものと考えられる。たとえば、津田左右吉氏は、この点を次のように述べている。

国家の統一ができてからは、皇室はいはゆる万世一系でずっと今日までつゞき、さうして皇室が始めて全民族を統一せられ皇室の前には統一せられた国家の君主は無かったので、ニホン全体の政治的君主は皇室の他には無いのであります。さうしてそこに皇室の権威が現はれてゐるのであります。……皇室についてもっと大せつなのは、皇室がニホン民族の内部から起って民族を統一せられたといふこと、その統一のしかたが概して平和的なものであったといふことであって、そこに皇室の権威の性質があります……。

② 日本は対外戦争が少なかったこと

島国などの条件もあって、日本は国家成立過程において異民族との戦争が少なく、この点も皇室存続の要因となったといわれる。

異民族との大規模な戦争の場合、どうしても君主が先頭に立つ必要が生ずる。そして敗戦の場合は勿論のこと、そうでなくとも、戦争、殊に対外戦争は君主の地位を不安定にしがちである。たとえば、津田左右吉氏は、この点を次のように述べている。

要するに、異民族との戦争といふことが、君主の地位を不安定にし、その家系に更迭の生ずる機会を作るものである。ところが、日本民族は島国に住んでゐるために、同じ島の東北部にゐるアイヌの外には、異民族に接触してゐないし、また四世紀から六世紀までの時代に於ける半島

及びそれについてゐる大陸の民族割拠の形勢では、それらの何れにも、海を渡ってこの国に進撃して来るようなものは無かった。それがために民族的勢力の衝突としての戦争が起らず、従ってこゝにいったような君主の地位を不安定にする事情が生じなかつたのである。

③ 天皇が直接政治に関与することが少なかったこと

一般に古代における君主の主な仕事は戦争であり、それにともなつて種々の政治上の仕事も生じたという。

しかし、前述の如く、皇室を中心とする日本国家の統一は、概して宗教的・呪術的権威に服従させる仕方で行なわれ、内外の戦争は比較的少なかったといわれる。そういうこともあって、当初より天皇は政治的・権力的存在ではなく、直接政治に関与することも少なかったという。そのため、天皇の失政という事態がほとんど起こらず、その地位が安固になっていったものと考えられる。たとえば、津田左右吉氏は、この点を次のように述べている。

日本の上代には、政治らしい政治、君主としての事業らしい事業が無かつた、といふことであつて、このことからいろいろの事態が生ずる。天皇みづから政治の局に当られなかつたといふこともその一つであり、皇室の失政とかその事業の失敗とかいふことが無かつたといふこともその一つである。多くの民族の事例について見ると、一般に文化の程度の低い上代の君主のしごとは戦争であつて、それに伴つていろいろのしごとが生ずるのであるが、国内に於いてその戦争の無かつた我が国では、政治らしい政治は殆ど無かつたといつてよい。従つてまた天皇のなされることは、殆ど無かつたであらう。

④ 天皇はむしろ宗教的・文化的な存在であつたこと。

天皇は、当初より、武力的・政治的な存在として、その勢力・権威を示すのではなく、むしろ宗教的任務と文化的な地位とによって、その存在意義が認められていたという。

これにより、天皇が人々の服従すべき存在というよりも、親しむべき尊ぶべき存在として、日本国家統一の象徴にふさわしい存在になっていったもの

と考えられる。たとえば、同じく津田左右吉氏は、この点を次のように述べている。

第四には、天皇に宗教的の任務と權威とのあったことが考へられる。天皇は武力を以て其の權威と勢力とを示さず、また政治の実務には与らなかつたようであるが、それにはまた別の力があって、それによってその存在が明かにせられた。それは、一つは宗教的の任務であり、一つは文化上の地位であつた。……………

……………すべての人に知られてゐた天皇の宗教的な地位とはたらきとは、政治の一つのしごととして、国民のために大猷のような呪術を行はれたりいろいろの神の祭祀を行はれたりすることであつたので、天皇が神を祭られるといふことは天皇が神に対する意味での人であることの明かなしるしである。日常の生活がかういふ呪術や祭祀によって支配されてゐた当時の人々にとっては、天皇のこの地位と任務とは尊ぶべきことであり感謝すべきことであるのみならず、そこに天皇の精神的權威があるように思はれた。何人もその權威を冒瀆しようとは思はなかつたのである。……………

第五には、皇室の文化上の地位が考へられる。……………一般的にいつても、皇室はおのづから新しい文化の指導的地位に立たれることになつた。このことが皇室に重きを加へたことは、おのづから知られよう。さうしてそれは、武力が示されるのとは違つて、一種の尊さと親しさとがそれによって感ぜられ、人々をして皇室に近接することによってその文化の恵みに浴しようとする態度をとらせることになつたのである。⁶⁰

⑤ 国家成立後日本が順調に発展したこと

国家成立後も、日本は単一民族単一国家の体制で順調に発展していった。そして皇室は、大陸文化の摂取などによる新しい文化発展の指導的地位に立つて、国づくりの中心として励み、国民生活を向上させるために努力したといわれる。そのため、皇室の存在の重要性がますます認められていったものと考えられる。たとえば、坂本太郎氏は、この点を次のように述べている。

それよりも天皇による国家の統一は、時に軍事行動を必要としたことであろうが、概して宗教的・呪術的權威に服従させる仕方で行われ、天皇の地位の世襲は国民一般からは無理なく承認せられたこと、天皇もそれに対して新文化を摂取し国民生活を向上させるのに熱心であつたことなどによって、順調に日本の国家は発展したものと見る。⁶¹

上に述べたような日本国家成立期の事情を経るうちに、皇室は特別な存在であり、皇室中心の国家体制が当然であるという觀念を、人々が強く抱くようになっていった。そしてさらに皇室は、日本国家の統一性と永遠性に対する日本国民の願いを象徴する存在として、将来にわたつてもその存続を人々が強く願うようになっていったと考えられる。

日本神話には、このような日本人の考えが反映しているのではないか。たとえば、津田左右吉氏は、この点を次のように述べている。

かういふようないろいろの事情にも助けられて、皇室は皇室として長く続いて来たのであるが、これだけ続いて来ると、その続いて来た事実が皇室の本質として見られ、皇室は本来長く続くべきものであると考へられるようになる。……………（王室がしばしば更迭した事実があると、王室は更迭すべきものであるといふ考えが生ずる。）従つてまたそこから、皇室を未来にも長く続けさせたいといふ欲求が生ずる。この欲求が強められると、長く続けさせねばならぬ、長く続くようにしなければならぬ、といふことが道徳的義務として感ぜられることになる。もし何等かの重大なる事態が生ずると（例へば直系の皇統が断えたといふようなことでもあつたと）、それに刺激せられてこの欲求は一層強められ、この義務の感が一層固められる。六世紀のはじめのころは、皇室の重臣やその他の朝廷に地位をもつてゐる権力者の間に、かういふ欲求の強められて来た時期であつたらしく、今日記紀によって伝えられてゐる神代の物語は、そのために作られたものがもつてゐる。

……………かういふ神代の物語に於いて、皇室をどこまでも皇室として永久にそれを続けてゆこう、またゆかねばならぬ、とする当時の、またそ

れにつづく時代の、朝廷に権力をもってあるものの欲求と責任感とが、表現せられてあるのである。さうしてその根本は、皇位がこのころまで既に長くつづいて来たといふ事実にある。さういふ事実があったればこそ、それを永久に続けようとする思想が生じたのである。⁶⁴

(3) 日本史上における皇室の性格

第三に、日本国家成立の過程が一段落して以後現代に至る、日本史上における皇室の性格・特質の面から、その存続理由を紹介しよう。

もっとも、ここで扱う内容は、(2)でみた日本国家成立期における皇室のあり方と密接に関連している。すなわち、日本国家成立期の皇室のあり方は、その後も皇室の伝統として継承され、今日まで皇室の性格を規定してきていると考えられる。

① 天皇は国家および国民統合の象徴であったこと⁶⁵

日本が島国であり、また単一民族単一国家であることは、日本人の秩序・統一にとって利するところが大きであった。

しかし、日本人は一面ではきわめて派閥的・分裂的傾向をもっていて、他面ではそのことを反省し、天皇の存在を通して国民統合の重要性を自覚してきたといわれる。すなわち、皇室の祖先を中心に日本民族が統一されたという日本国家成立期の皇室の伝統を受けついで、その後の天皇は、日本国家・国民の統一性・全体性・永遠性など、日本民族の理想・願望の生きた目標となり、皇室の栄えは日本国民全体の栄えであると考えられてきたというのである。つまり皇室の存続が、日本民族の秩序・統一・永続を象徴する公共的存在として、日本国民に広く支持されてきたと考えられる。この国民統合の象徴という天皇の性格を、倫理学者和辻哲郎氏は、次のように述べている。

わたくしは、皇統の持続が皇室の無力とわが国の地理的歴史的孤立性とにもとづくという考えや、天皇制が時々の支配階級の手段として用いられたという見方などに、必ずしも反対するものではない。むしろ実権のない皇室に権威が保たれ、その権威が実権あるものにも不可欠のささ

えとなっていたことに、大きい意義を認めるものである。それは天皇が国民の全体性の表現者であったがゆえにほかならないであろう。⁶⁶

② 日本の皇室は日本民族の宗教的・道徳的・文化的中心であったこと⁶⁷

日本史上における皇室の特質は、日本民族の宗教的・道徳的・文化的中心たるところにあり、それが国民統合の象徴たる地位にふさわしい天皇の精神的権威のよりどころともなり、天皇が榮譽の源泉ともなりえたといわれている。すなわち、歴代天皇は、天下万民の安泰を神に祈念する最高司祭者としての立場を世襲され、また常に徳性の涵養に努められるとともに「国民の父母である」という自覚と責任をもって天下万民のために尽力されている。さらに皇室は代々文化・芸術の保護者として伝統文化を継承する役割を果たされるとともに、歴代天皇自身も学問と文芸を好まれるなど、皇室は宗教的・道徳的・文化的中心となってきたというのである。

特に歴代の天皇が、その地位にふさわしい精神的・道徳的・文化的努力を積み重ねて、皇室自身の中に永続に値する伝統を継承していくことにより、その精神的権威が人々に広く認められ、日本民族の理想・願望の生きた目標になってきたという指摘もされている。たとえば、坂本太郎氏は、「学問に心を磨き、聖賢の徳を身につけること」など、歴代天皇に通ずる特質を紹介した後に、次のように述べている。

こうした古代からの長い歴史の積み重ねがあるからこそ、明治時代の国民の明治天皇尊敬の心が無理なく生まれたのであり、漱石が『ころ』で示した明治天皇観が素直に私どもには受け入れられるのもである。外国人が往々言うような、明治時代に急速に作り上げた天皇教、天神神聖観などが、そんなに根強く国民の間に根を下ろすはずはない。要は歴史の問題であり、伝統の重みである。

今の若い人々の皇室観は、私どもとはかなり変わったものとなっているであろうが、二千年の歴史の成果はそう簡単に消え去ろうとは思はれない。天皇は一切の権力を失った今の形を保つ間、末永く安泰に日本に君臨するであろうというのが、私の観測である。⁶⁸

③ 天皇は政治権力者ではなかったこと⁶⁹⁾

上の坂本太郎氏の引用文でも、天皇の安泰の要因として権力をもたないという特質をあげている。

日本史上の天皇をみても、独特の権威を備えた存在、権威の源泉という存在ではあったが、天皇が直接政治にあたり、権力を用いたりしたことが少なく、ましてや武力をもったりしたことは稀であったといえよう。しかし、これは天皇が政治に関心をもたれなかったということではない。そうではなくて、天皇自らは権力を持たず、また持とうともされず、その時々政権の存在を容認しながら、それを超越して存続してきたところに、日本皇室の一つの特質があるというのである。これは日本が島国であり、対外戦争がほとんどなかったことにもよるであろう。

世界史上をみても、政治の権力闘争に王室が直接かかわったり、国民の権利要求に王室自身に対立したりするようになると、王室が倒れるという例が多い。日本の皇室は権力者ではなかったため、そういう状況に置かれることがほとんどなかったというのである。

このような特質によって、天皇がいつの時代でも、政治権力者以上の尊崇をうけ、永く存続している理由であると考えられる。たとえば、同じく坂本太郎氏は、この点を次のように述べている。

こういうように、危険な場合もあったのでありますが、それをのりきって、皇統の連綿性を得たのであります。その原因はどこにあるか、これを分析して考えれば、一つには、天皇に強大な権力がなかったということが考えられます。権力が強大であれば、そう長い伝統を保つことはできない。力あるものは、必ず力によって滅ぼされる。奢るものは久しからずであります。権力のなかったということが、長続きした大きな原因であろうと思います。⁶⁹⁾

④ 皇室が時勢の推移に順応してきたこと⁶⁹⁾

国家・国民統合の象徴である天皇は、社会組織や経済機構がどのようなものであっても、またそれらがどう変化しても、皇室の本質ともいべきそれと

は別の精神的権威を持ちつづけてきたのである。すなわち、日本皇室は、政治権力者ではなかったので、一方ではその本質を失うことなく、他方ではいつも時勢の推移に順応して変化し、その時々政治形態に適合しながら存続してきたのである。

しかも、「王政復古」という形で行なわれた明治維新のように、日本皇室は歴史を逆行させるような存在ではなく、しばしば歴史を前進させる役割も果たしてきたともいう。

このように時勢の推移に順応してきたことも、日本皇室の存続理由の一つと考えられる。たとえば、林健太郎氏は、この点を次のように述べている。

イギリスにもフランスにも、王制復古(レストレーション)といわれる事件がありましたが、これはいずれも歴史を逆行させるような事件でありました。しかし、日本の王制復古は歴史を前進させた事件でありました。明治維新後の日本の近代化がいかにもざましいものであったかは、世界的に有名であります。そこでイギリスの立憲君主制に似た形が次第につくられたわけですが、イギリスでは一時は革命によって王様が処刑されるというようなことも起こっています。しかし日本では、古い時代から天皇が政争の外におられたため、かえって皇室の存在が国家を進歩させるという役割を果たすことができたのであります。⁶⁹⁾

⑤ 皇室が国民と苦楽をともにしてきたこと⁶⁹⁾

日本の皇室は権力的存在ではなかったから、一般民衆に対して武力的圧迫を加えたり、民衆を敵として征討したりするような事態は起こらなかった。また私生活においても、外国の君主にしばしばみられたように、豪華な生活をするといった例はまことに少ないといわれている。

それよりも、歴史の推移に従って柔軟な姿勢をとるとともに、いつも国民の安泰を願い、国民と苦楽をともにして歩むということが、日本皇室の一つの伝統として継承されてきている。地方巡幸など、第二次世界大戦後の天皇の姿は、その端的な事例であろう。

このいつも国民と苦楽をともにするという特質も、日本皇室の存続理由の

一つと考えられる。たとえば、津田左右吉氏は、この点を次のように述べている。

特にその長い歴史において、皇室は曾て民衆と争はれたこと民衆を敵として見られたことが無いのみならず、いつの時代にも権力をもってゐられなかったため、民衆は皇室に対して抑圧をうけるといふ感じを少しももたなかったのと、上代においては事実上文化の中心であられ、また後世においては一種の思想の上で文化的地位をもってゐられたのと、これらの事情が国民の眼に皇室を美しいものとして映じさせたので、それがいはゆる万世一系の皇位といふ思想のますます固められて来た理由の一つとなったとともに、世襲的君主国である以上、その世襲がかわることなき一系の世襲であるところに、皇位そのものの美しさが感ぜられもするのであります。⁴⁰⁾

(4) 日本人の国民性の特質

日本の皇室が、二千年近く存続している理由として、前項では、日本史上における天皇の性格・あり方など、主として皇室側の理由を紹介した。しかし他面では、日本人の国民性や日本の社会構造など、皇室を支えてきた日本人、日本社会の特質からの説明も重要である。すなわち、天皇制の存在は、日本の民族精神や社会構造に根ざしたものに外ならない。そして戦後の天皇制研究では、むしろこの面が重視され、究明されてきたと思われる。

そこで第四には、まず天皇制を支えた日本人の思想や国民性についての面で、従来の見解をみていくことにする。

① 日本人の中に尊皇心が一貫して流れていたこと⁴¹⁾

皇統を我国至高の存在、最も誇るべき存在として仰ぐ尊皇心が、日本国民、特に庶民層の間に一貫して流れていたことが、日本皇室存続の大きな理由としてあげられている。

特に武家時代の進展にともない、皇室は政治的には無力となるが、それでも皇統に対する尊崇の念は失われず、武家政権を超える独特の権威が広く国

民の中に認められていたのである。

それで、日本史上皇統の連綿性が危機となる場合もあったが、それを乗り越り今日まで連綿性を保つことができたのは、皇室の永続を願う日本国民の尊皇心によるところが大きいといわれる。たとえば、法律学者山崎丹照氏は、この点について次のように述べている。

然らば、わが国において古来常に、その天皇制観念の中心をなしてきたところのものは、果して何であったらうか。それは他なし、わが国民が、皇統を目してわが国至高の存在となし、これを以て国家権威の象徴と仰いだ点である。而してこの国民心意こそ天皇制の内容をなしてきたところのものであり、同時にそれがまた天皇制を持続せしめてきたところのものである。……かかるが故に古来わが国に輩出した幾多の覇者といえども、この牢固たる国民心理を無視することは絶対に不可能であったのである。従ってたとえ現実の天皇その人に対しては、時に敢て廃立を強行するの挙に出づることありしとするも、而も天皇制そのものには一指をも触れ得なかつたのである。これを要するにわが天皇制の中心観念は、国民が皇統を目して国家至高の存在とし、これを国家権威の象徴として斉しく仰ぐということにある。いわゆる天皇が、「国民の憧憬の中心」として存在する、というところにあるのである。従ってその天皇の地位は、どこまでも、国民心意の上にその基礎をおくものである。⁴²⁾

② 神話が日本人の思想に大きな影響を与えてきたこと⁴³⁾

日本民族は他民族から征服・支配をうけなかったため、神話の世界が歴史時代へもうけつがれ、日本人の生活上の指導理念として生命を持ちつづけ、皇室存続の支えになったといわれている。たとえば、皇室の永続性は、そのよりどころが、権力や実力という要素ではなく、皇祖神天照大神の存在をはじめとする神話にあるとされたりした。また神話を源とする敬神崇祖の思想は、一方では皇室の本質である祭祀となり、他方では各地の氏神、神社などとなっている。殊に戦国時代以来、天照大神を祀る伊勢神宮への参詣が庶民

の間で盛大となったが、これは神話中最も偉大で最も貴い神である皇祖神天照大神が、万民の祖神でもあると考えられていたためという。

このように神話が日本人の思想・生活の基盤となり、皇室存続の一要因となってきたと考えられる。たとえば、水戸部正男氏は、この点を次のように述べている。

高天原ではアマテラスオオカミが神々を統べ、地上では天皇が皇祖神に毎日奉仕をかかさず行なわれ、国家組織を通じ各地の神々を祭り、各氏はそれぞれに祖神を祭ったのである。平安時代に藤原氏が摂関政治を行なうことを当然としたのは、アマテラスオオカミが藤原氏の祖神アメノコヤネノミコトに神勅したことに基づくとする伝承が根拠となっていたのである。かくて、神話は単なる神々の物語りというようなものではなく、歴史と結び、現実国土の生活の指導理念として実際社会に生命をもっていたのである。これまで、何回か、敬神と尊皇の一体不可離の事実を述べたが、神話と現実世界の関連の深いことを考えると、それは当然のことであり、天皇存続の最も大きい要因は、日本人の敬神思想と国家的な神祇制度が長く行なわれたことにあるもの⁴⁴と考えるのである。

③ 日本人全体が強い同族意識を持っていること⁴⁵

古代以来今日に至るまで、日本人全体は強い同族意識を持って結ばれており、その中心の皇室は、日本人全体の宗家に位置すると考えられてきたというのである。いわゆる「家族国家観」はその一例である。こうした日本人の国民性も、皇室存続の一要因と考えられる。たとえば、肥後和男氏は、この点を次のように述べている。

それ（天皇を支えた一つの理想的精神）は拡大された家という構想によって支えられた。……………。

……………明治の日本が見事な統一国家として一路近代化に進んだのも、二千年にわたってつちかわれた天皇による統一があったからである。同じ言葉を用い同じ生活をしているこの民族の融合が、日本の大きな特徴であることは近時大きく外国からも認められ、ジャパンカンパニイなど

といわれる。最近はいろいろの動きが出て来ているが、とにかくわれわれは強い同族感情で結ばれている国民であることは疑いない。そうした事実は古代の神話をめぐって多年の間の天皇統治がもたらした大きな効果である。戦前の皇室はこの国民の宗家として考えられた。今日の研究によれば、それは一種のフィクションにすぎない。しかしフィクションにはそれだけの効果があり、それがもたらした効果は今日となつては否定しがたい。……………。こうして今日では深い同族意識が完成している。それが天皇制とたがいに因果の関係にあると思われる。江戸時代の歌に「われもまた国常立の末なればその中頃ほとにもかくにも」というのがあり、みな血筋の上ではつながっているとの観念が成立している。士農工商といった区別はあっても元をせせばみんな同じという理解が成り立ち、拡大された家族といった解釈も行なわれた。マルクスは世界の労働者よ団結せよと叫んで労働という共通の境遇による結合を説いたが、日本では血筋のつながりという考えで相互をつないだ。フィクションという自覚なしにそう思いこんだところがある。そうした意識と理解の核として天皇があった。今日ではそれはいわば過去のことであるが、その過去の歴史を大きく支えたこの自覚と意識を抜きにして日本の歴史を理解することは困難である。そこに天皇の歴史的意味があると思う。われわれの祖先はそれを信ずることによって国家の統一と永遠とを希求したのであった。たしかにそれは宗教的な性格が強い。それはしかし、日本の歴史と文化を理解する根本的なキーのひとつであることは疑いない。⁴⁶

④ 日本人は血筋（系統）意識が強いこと⁴⁷

日本人は、“天から命を受けた” というような理屈ではなく、どういう血筋（系統）であるかによって、格別の権威を認めようとする国民性であるといわれる。そしてこの血統（系統）主義は、天皇制の堅固な防壁になり、いかに強大な権力を持つ者が出現しても、血筋外の者が天皇になることを国民全体が決して承認しなかったというのである。

このような血筋意識が皇室を存続させる一つの要因になったと考えられ

る。たとえば、英語学者ではあるが、歴史に関する著述も多い渡部昇一氏は、この点を次のように述べている。

シナでは歴代の王朝が変わるたびに、それぞれの王朝が「天から命を受けた」などという苦しい言い訳をして、建国と聖なる感情を結びつけようとする。

神話と歴史が切れた国では、理屈で言わなければならないところを、日本では血で認めるといふ、ひじょうに生物学的な連続性があり、この生物学的な連続性が数千年にわたっているというところが、日本の特徴である。⁴⁸

(5) 日本の社会構造の特質

戦後の歴史学の特色の一つは、歴史上の現象を、その時々⁴⁹の社会構造をもとに究明していくことにあると思われる。そこで天皇制存続の問題も、それぞれの時代の社会構造との関連において考察していくことは重要である。

しかしここでは、おもに日本史を通じてみられる社会構造の特質という面から、皇室存続の理由としてあげられている見解を中心に紹介することにする。もっとも、この日本の社会構造は、広池千九郎氏なども指摘しているように、前項でみた日本人の国民性と密接に関連しているであろう。

① 日本社会は階層差が比較的少なかったこと⁴⁹

日本社会は、諸外国の場合と較べて、全体的に階層差が少なく、一般民衆の生活も比較的安定していたといわれている。しかも、前述したように、日本皇室は民衆に対して専制的ではなく、その生活も比較的質素だった。それにより、日本では社会を一変するような革命がおきず、皇室が存続したというのである。

確かに、はなはだしい貧富の差などにより一般民衆の生活が安定しない中で、君主が専制的でしかも豪華な生活を続けたりすれば、永く王位を維持することはむずかしい。たとえば、倫理学者勝部真長氏は、この点について現代の状況を中心に次のように述べている。

わが国の強味は、中間層がよく発達してその厚味があるという点にある。さらにいえばわが国には、特権階級はなるほど存在するけれども、貴族とよぶべき階層がないということである。天皇家を別にして、わが国には貴族らしい貴族はいない。他はすべてドングリの背くらべにすぎない。多少、財産が余計にあるという程度で、素性からいえばみな庶民である。一国内に階層差がないという点では、ヨーロッパの諸国と比較しても、わが国の著しい特質をなしているということができよう。

……（エチオピアの場合）三千年の歴史を誇る皇統が、なぜ脆くも一夜にして倒れたか。聞けば一握りの皇帝を取り巻く特権層のみ富んでいて、一般庶民は貧しく飢えに苦しんでいたと伝えられる。……。

要するに「民のかまどは賑わ」なかったのである。民衆の生活が安定せずして、ただ三千年の血統にアグラをかいては、王位を維持することはできない。⁵⁰

② 日本はタテの人間関係を重視する、いわゆる「タテ社会」であること⁵⁰

日本人はタテの人間関係を重視する社会であり、血縁的（系譜的）観念にもとづく上下関係で秩序を保持しようとするといわれている。

一系世襲の存続は、こうした社会構造が大きな原因になっているという。たとえば、日本史家水野祐氏は、この点を次のように述べている。

いま一つ日本の天皇家の存続の原因となったと思われるのは、日本人の間に根ざしているタテ関係の重視という慣習である。

一度天皇が神聖な出自であり、神権統治の権能を有することが承認され、天皇としてその地位に推戴されると、その地位と職能とを固守しようとするようになり、その血統の裔孫に対しても同様な権能を有するものと思惟して、尊重するという気持が働く。それはただ天皇の場合に限らず、あらゆる場合に同様の考え方が作用するのが日本人の共通の特徴である。……。

戦国動乱の時代にも、衰微した天皇、無力であった天皇が、よくその地位と権威とを保ってきたのは、実力主義の武士階級の間にも、古い氏

姓社会時代から発生していた、タテの社会関係を基本とする観念が、なお脈々と生きつづけていたためである。

そして貴族時代も、武家時代も、また町人・市民社会の時代になっても、この氏共同体に発する観念は、基本的な日本人の理念としてうけつがれてきているのであって、これも日本の天皇が存続してきた一つの大きな原因として、私はかぞえたいのである。⁶⁹

③ 天皇が日本社会の安定点という役割をになってきたこと⁶⁹

国家・社会には「統合」という機能が不可欠であるが、日本では皇室が日本民族の平衡・調和を保つ機能、国家・民族の分裂を抑制し、それを統合していく機能を果たしてきた。たとえば、天皇家が他と違い、姓をもたない点など、天皇は日本社会の中で、政治的次元を越えた高いところに位置する特別の「貴種」とされてきた。そして政治的社会の中で、党同派閥の拮抗関係がきわだったとき、その極端な分裂を抑制していくような社会分裂調整力を発揮したのが天皇であったという。

つまり天皇は、日本国家民族の秩序・統一の中心であり、日本社会の安定点という役割をになってきたのである。それにより日本は比較的平和と安定の社会を維持できたし、皇室もまた存続できたと考えられる。これは日本民族の生み出した一つの英知だともいわれている。たとえば、肥後和男氏は、この点を次のように述べている。

日本人は一面ではきわめて派閥的であり、分裂的傾向ももっている。そのことが一面で反省され、統一の重要性が自覚され、その集中的表現として天皇が長く存続しているのではあるまいか。現実に派閥的であることは、人々が個人にまで徹底することができないことである。日本では西洋的意味における個人主義の発達がなく、人々はいつも何かの集団に属することによって安心している。学閥、閥閥、財閥、門閥、藩閥、等々の発達はそれによる。会社員の会話をきいていると、自分の会社をウチといい、相手の会社を「お宅」とよぶことが多い。これらの「閥」は、その点で家族的感情によって支えられている。それが離合集散をく

りかえしている。こうした日本社会において、民の父母として天皇が長くつづいたことは、まことに偶然ではない。⁶⁹

④ 古代以来の天皇の権威が、封建時代の支配者などによって利用されたこと⁶⁹

武家が権力を掌握した封建時代にも、なぜ皇室が一定の地位と役割をもって存続したのか。これは日本皇室存続の理由を究明していく上で重要な点であろう。

従来の方の見解は次のようである。封建社会は、領主ごとに分裂する傾向をはらむから、国家的秩序・統一のためには、その中心となるべき権威を必要とする。また封建社会は上下のタテの関係を軸として成り立つ社会であり、支配者は支配の正統性を主張するために、より上位の権威を必要とする。このような点から、古代以来の天皇が封建社会の支配者によって利用され、武家時代にも天皇が存続したというのである。たとえば、豊田武氏は、この点を次のように述べている。

いったい封建時代には、封建領主が各地に割拠しておのおのその勢いを争っていたから、世の中はともすると、分裂に分裂を重ね、無政府の状態におちいり易くなっていた。しかし一方では、この分裂的な、そして無秩序な無政府状態を避けようとする欲求も強く、封建領主も何らかの形で、安定した権威をつくり出し、それによりすがる事によって、領国の平和と秩序を得ようと考えたのであった。……。

その上、封建制は、上と下のたての関係を軸としてつくられた制度である。天は人の上に人をつくり、人の下に人をつくるというのが、封建社会の常であった。したがって武家時代の人間は、上は將軍から下は耕作農民に至るまで、だれ一人として自主独立の権利はなく、みな何かの権威に依存せねばならなかった。……上級の支配者も、またそれより上の支配者から支配権を保証され、それによってはじめてその地位を安定することができた。一番上の將軍といえども、その支配権はやはり絶対ではなかった。何故なら、直接に全国土を領有していなかった將軍

は、自分の直接の支配地を治めるようにかたんには、大領主を無制限に支配することができなかつたからである。その支えとなる一つは、將軍や王が自分の直轄領地を他の領主たちより多く持つことであり、一つはさらに精神的な権威を仰いで、これを支配のよりどころとすることであった。

そのころ精神的な権威としては、古代以来の伝統を保持する皇室があるばかりである。⁶⁹

3. 日本皇室の本質的な存続理由

前節で、戦後の天皇論にみられる日本皇室の存続理由を、五つの方面から21項目に要約して紹介した。日本皇室は、一つ二つの理由で存続したわけではなく、恐らくこうした多くの理由が重なり合って存続したのであろう。

そこで、今後これら先学の成果を十分にうけとめ、それぞれの理由の深化およびそれらの相互関係、さらにはその中でもより本質的理由の究明などをすすめていきたいと考えるが、本節では、多くの理由の中でもより本質的な存続理由に関する若干の考察をしておこうと思う。

まず前節で紹介した理由に対する石井紫郎氏の批判を紹介しよう。石井氏は、多くの人が注目している、(4)の①で紹介した「天皇に対する尊崇心」という理由について、次のように批判している。

M. ウェーバーを引き合いに出すまでもなく一般に支配は被支配者の側にその支配を正当とする意識がなければ永続しないのだから、この意味では庶民の尊崇心が天皇制を存続させたというのはいわば当り前のことをいっているにすぎない。従ってこの論点を徹底するにはこの意識の存在を出発点として、何故この意識が生まれたか、そして何故天皇制が政治的に没落の一途をたどる中世を通じてこれが育ってきたのかという問いに進まねばならないであろう。⁶⁹

要するに、石井氏は、天皇制を存続させた「天皇への尊崇心」が、何故生まれそして育ってきたのかという点こそ究明されねばならない点だと述べて

いる。

さらに、「天皇に対する尊崇心」という理由とともに武家時代に天皇が存続したもう一つの大きな理由とされ、(5)の④で紹介した「封建社会一般の性質上権威が必要とされるからだ」という理由についても、石井氏は次のように批判している。

これはたとえヨーロッパ封建社会における王権の「権威」が説明できたとしても、古代から連綿として続いて来た「万世一系」の天皇制の「権威」を説明しつくすことはできないであろう。……（武家時代において天皇という）没落した「権威」「過去の事実」が何故利用されるのか、どうして、利用価値があるのかという点についての説明はなされていない。⁶⁹

つまり、封建的権威が、何故古代以来の天皇でなければならなかったのかという究明こそが課題だとしている。

石井氏の批判は、武家時代のみならず、日本皇室のより本質的な存続理由を考察していく場合、重要なポイントであろう。ではこうした批判をどう受けとめたらよいのであろうか。

ここで、日本皇室の存続に関する皇室側の考えをみてみよう。今上天皇は、記者会見などの折に、「皇室の伝統が二千年も続いていることは、なにか特別の要因があるとお考えでしょうか」などという、皇室の存続理由に関係する質問をうけられたことがある。それらの質問で、今上天皇は、皇室の存続理由として、国民の側からは皇室への尊崇・信頼、いわゆる尊崇心があったこと、皇室の側からはつねに国民の幸福を第一に考えるという伝統によること、の両面をあげておられる。⁶⁹津田左右吉氏も、このような皇室と国民の関係を、次のように注目している。

歴史に養はれて来た国民に対する皇室の態度と、皇室に対する国民の感情とが、皇室の尊榮と人民の幸福とは一致するといふ考えを起させた。⁶⁹

長い日本歴史の中で累積されてきたこのような皇室と国民との関係こそ

は、皇室の連綿性に対する本質的理由を示唆するものとして注目してよいのではあるまいか。

ところで、このような皇室と国民との間柄は相互関係にあり、切り離して考えることはできないであろう。しかし、国民の尊崇心は、自然に生まれるものではなく、国家成立以来の皇室のあり方によって生まれ、育ってきたのであり、両者の関係の主体性はより皇室側にあるといえよう。つまり、日本の国家成立およびその後の日本歴史を通してみられる皇室の性格・あり方の中にこそ、日本人の天皇に対する尊崇心など、皇室の権威を認め、皇室を存続させてきたより本質的な理由が見い出せるのではあるまいか。

そして皇室の中には、自らの「積徳」によってこそ、天皇の地位が保たれるという自覚が認められるのである。たとえば、第95代花園天皇が皇太子量仁親王に宛て、帝王の徳とそれを身につけるための学問の必要性とを諭した、いわゆる「誠太子書」の中で、次のように述べている。

天は衆民を生じ、これを治めるために君を立てるのだと聞く。その天子の地位につかれるためには、徳を身に備えなければならない。力をもってその地位についたとしても、中国の秦、隋が漢、唐にたちまち滅ぼされてしまうような結果になってしまう。……薄徳をもって神器を保とうとしても、それは道理が許さない。⁶³（大意）

要するに、力による地位は永く維持することはできないし、薄徳でもって天皇の地位を保とうとしても道理が許さない、と述べている。

先の今上天皇および上の花園天皇を通してうかがわれるように、自ら徳性の涵養に努めるとともに、常に国民の幸福を第一に考えるという皇室の伝統こそ、皇室の最も意義深いところであり、皇室存続のより本質的理由ではあるまいか。たとえば、肥後和男氏は、「二千年にわたって天皇が存続し、中世にいったん衰えたものが近代に再び大きく復活したことは、その本質において深い意義をもつからにちがいない。」と述べ、皇室存続のカギが皇室自身の中にあることを指摘している。そしてこの点こそが、本節のはじめに紹介した石井氏の批判に対して答える一つの道ではあるまいか。

第二次世界大戦で日本が敗戦国になったにもかかわらず、天皇制が存続したことは極めて注目すべきことである。これについて、坂本太郎氏は次のように述べている。

国を挙げての戦争で敗北の憂き目にあった皇帝は、退位か配流か、その地位を失うことは古今の通例である。ひとりわが天皇が、憲法上の地位権限はかわったといえ、なお国家及び国民の代表として、以前に准ずる地位を持続しているのは、異例のことである。⁶⁴

そしてこの時の存続原因も種々考えられるであろうが、坂本氏は、「日本歴史と共に歩んだ天皇の長い歴史による所が、そのもっとも大きな原因となっていることを、私は信じて疑わない。」と述べ、歴史の中で積み重ねられてきた天皇のあり方に注目している。

また評論家村上兵衛氏も、敗戦後も天皇制が存続できた理由として、次のように天皇自身の力に着目している。

この天皇制の最大の危機を乗切ったものは、もとより日本国民の天皇にたいする広汎な支持であったろうが、また日本の文化を体現した天皇じしんの力であったとも言えそうである。⁶⁵

以上の点から、日本歴史を通してみられる皇室と国民の関係、特に国民に対する皇室自身のあり方の考察をすすめていくことは、日本皇室の存続理由を究明する上で最も重要な点だと思われる。

ところで、最初に紹介した戦前の広池千九郎氏による皇室の存続理由は、戦後の研究内容と較べると、(1)の面にはふれていないし、(2)から(5)までの面も部分的指摘にとどまっている。しかし、国家成立以来日本皇室に継承されているすぐれた道徳性こそ日本皇室の本質だとし、それが日本皇室存続の最も重要な理由としている点は、以上の検討からみて、今後日本皇室存続のより本質的理由を考察していく場合、あらためて注目してよい見解であろうと考える。

注

- (1) 肥後和男著『天皇はなぜつづいたか』〈日本文化学術叢書〉、日本文化連合会、昭和35年、10頁。
- (2) 広池千九郎著『道徳科学の論文』(4冊)、道徳科学(モラロジー)研究所、昭和3年初版。
- (3) 同上、序文102~103、本文15、1843~1846、2925~2928頁。
- (4) 同上、15、1844~1845、1890~1897、1959、2193、2927~2928頁。
- (5) 同上、1845、1924~1928、1959、2193、3116~3117頁。
- (6) 同上、1917~1923頁。
- (7) 同上、2457~2459頁。
- (8) 注(6)(7)と同じ。広池千九郎著『日本憲法淵源論』(大正5年刊)。後に『広池博士全集4』(昭和12年刊、道徳科学研究所)に収録、459~460頁。
- (9) 豊田武「中世の天皇制」(『日本歴史』第49号、昭和27年6月)
- (10) 坂本太郎「日本歴史の特性」(現代のエスプリ『日本思想の構造』、至文堂、昭和45年、56頁)。
- その他、同様に日本皇室の存続理由の探求の重要性を説いた文献を、下記にくつつかをあげておく。
- 肥後和男著『天皇と国のあゆみ』、日本教文社、昭和40年、3~5頁。水戸部正男著『日本史上の天皇』、福村出版、1967年、221頁。林健太郎著『歴史の精神』、実業之日本社、昭和53年、145~146頁。水野祐著『天皇家の秘密』、山手書房、昭和53年、21頁、など。

- (11) 石井紫郎著『日本国制史研究1』、東京大学出版会、1966年、235~237頁。
- その他、この観点から武家時代の天皇制研究の重要性を説いた近年の文献を、下記にくつつかをあげておく。
- 網野善彦著『無縁・公界・楽』、平凡社、1978年、3頁。永原慶二「前近代の天皇」(『歴史学研究』第467号、1979年4月)。宮地正人「封建制下の天皇」(『歴史を学ぶ人々のために』第2集、三省堂、1977年、159~160頁)。豊田武著『日本の封建社会』、吉川弘文館、昭和55年、39~41頁、など。
- (12) その理由項目に関係する文献名は、項目の初めの補注でまとめてあげておくことにする。

- (13) 鈴木尚「日本人の起源」(岩波講座『日本歴史23 別巻2』、岩波書店、1964年、40~41頁)。水戸部正男著『日本史上の天皇』、222頁。勝部真長著『日本思想の分水嶺』、勁草書房、1978年、260頁。坂本太郎「皇室と日本人」(歴史百科第6号『日本皇室事典』、新人物往来社、1979年8月)。
- (14) 水戸部正男著『日本史上の天皇』、222頁。
- (15) 肥後和男著『天皇史』、富山房、昭和25年、338頁。水戸部正男著『日本史上の天皇』、221頁。林健太郎著『歴史の精神』、150頁。尾鍋輝彦著『明治の光と影』〈20世紀4〉、中央公論社、昭和53年、5~8頁。ジョン・W・ホール「君主制から封建制へ」(講座比較文化第6巻『日本人の社会』、研究社、昭和52年、221頁。勝部真長著『日本思想の分水嶺』、258頁)。
- (16) 林健太郎著『歴史の精神』、150頁。
- (17) 肥後和男著『天皇史』、336~339頁。水戸部正男著『日本史上の天皇』、222~223頁。津田左右吉「日本の国家形成の過程と皇室の恒久性に関する思想の由来」(『津田左右吉全集』第3巻、岩波書店、昭和38年、448頁)。
- (18) 肥後和男著『天皇史』、336~338頁。
- (19) 日本国家成立期の事情については諸説があるが、本項では、主として津田左右吉、坂本太郎両氏の見解をもとに紹介していくことにする。
- (20) 津田左右吉「日本の国家形成の過程と皇室の恒久性に関する思想の由来」(『津田左右吉全集』第3巻、448~451頁)。同「学問の立場から見た現時の思想界」(『津田左右吉全集』第23巻、95~96頁)。坂本太郎「皇室と日本人」(歴史百科第6号『日本皇室事典』)。
- (21) 津田左右吉「学問の立場から見た現時の思想界」(『津田左右吉全集』第23巻、96頁)。
- (22) 津田左右吉「日本の国家形成の過程と皇室の恒久性に関する思想の由来」(『津田左右吉全集』第3巻、452~453頁)。
- (23) 同上、452頁。
- (24) 同上、453~454頁。
- (25) 同上、453頁。
- (26) 同上、454~456頁。
- (27) 同上。

- ㉘ 坂本太郎「皇室と日本人」(歴史百科第6号『日本皇室事典』)。
 ㉙ 同上。
 ㉚ 津田左右吉「日本の国家形成の過程と皇室の恒久性に関する思想の由来」(『津田左右吉全集』第3巻、457～458頁)。
 ㉛ 津田左右吉著『日本の皇室』(『津田左右吉全集』第23巻、341～342頁)。和辻哲郎著『国民統合の象徴』(『和辻哲郎全集』第14巻、岩波書店、昭和37年、342～350頁)。肥後和男著『天皇史』、序文、339～343頁。同著『天皇と国のあゆみ』、225～230頁。同編著『歴代天皇紀』、秋田書店、昭和47年、2～5頁。和歌森太郎著『天皇制の歴史心理』、弘文堂、昭和48年、215～221頁。
 ㉜ 和辻哲郎著『国民統合の象徴』(『和辻哲郎全集』第14巻、350頁)。
 ㉝ 坂本太郎「日本歴史の特性」(現代のエスプリ『日本思想の構造』、59頁)。同「皇室と日本人」(歴史百科第6号『日本皇室事典』)。津田左右吉「学問の立場から見た現時の思想界」(『津田左右吉全集』第23巻、89頁)。同著『日本の皇室』(同、343～344頁)。同「未来の日本は過去の日本から作られる」(同、401～406頁)。肥後和男著『天皇史』、342～343頁。同著『天皇と国のあゆみ』、228～230頁。同編著『歴代天皇紀』、2～5頁。水戸部正男著『日本史上の天皇』、228～230頁。会田雄次著『ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界』、新潮社、昭和41年、179～184頁。水野祐著『天皇家の秘密』、262頁。宮田登著『民俗宗教論の課題』、未来社、1977年、33～34頁。拙著『天皇研究』、広池学園出版部、昭和56年、19～45頁。
 ㉞ 坂本太郎「皇室と日本人」(歴史百科第6号『日本皇室事典』)。
 ㉟ 津田左右吉「日本の国家形成の過程と皇室の恒久性に関する思想の由来」(『津田左右吉全集』第3巻、459～470頁)。同「学問の立場から見た現時の思想界」(同第23巻、99頁)。同著『日本の皇室』(同、340～343頁)。坂本太郎「日本歴史の特性」(現代のエスプリ『日本思想の構造』、59頁)。同「日本歴史と天皇」(別冊歴史読本『歴代天皇124代』、新人物往来社、昭和52年1月)。水戸部正男著『日本史上の天皇』、230頁。松本清張「「万世一系」天皇制の研究」(『諸君』昭和53年1月)。林健太郎著『歴史の精神』、147～149頁。
 ㊱ 坂本太郎「日本歴史の特性」(現代のエスプリ『日本思想の構造』、595頁)。
 ㊲ 津田左右吉「日本の国家形成の過程と皇室の恒久性に関する思想の由来」(『津

- 田左右吉全集』第3巻、460～462頁)。同「学問の立場から見た現時の思想界」(同第23巻、82、127頁)。林健太郎著『歴史の精神』、149～150頁。
 ㊳ 林健太郎著同上書。
 ㊴ 津田左右吉「日本の国家形成の過程と皇室の恒久性に関する思想の由来」(『津田左右吉全集』第3巻、463頁)。同「学問の立場から見た現時の思想界」(同第23巻、118～120頁)。肥後和男著『天皇と国のあゆみ』、191～194、229～230頁。水戸部正男著『日本史上の天皇』、178～179頁。坂本太郎「日本歴史と天皇」(別冊歴史読本『歴代天皇124代』)。拙著『天皇研究』、34、82～85頁。
 ㊵ 津田左右吉「学問の立場から見た現時の思想界」(『津田左右吉全集』第23巻、119頁)。
 ㊶ 安田元久「封建時代における天皇」(『思想』昭和27年6月号)。山崎丹照著『天皇制の研究』の序文、帝国地方行政学会、昭和34年。水戸部正男著『日本史上の天皇』、230～231頁。坂本太郎「日本歴史の特性」(現代のエスプリ『日本思想の構造』、56～57頁)。豊田武著『日本の封建社会』、39～40頁。
 ㊷ 山崎丹照著同上書。
 ㊸ 水戸部正男著『日本史上の天皇』、223～227頁。尾鍋輝彦著『明治の光と影』〈20世紀4〉、9頁。渡部昇一著『歴史の読み方』〈NON・BOOK 146〉、祥伝社、昭和54年、48～59頁。
 ㊹ 水戸部正男著『日本史上の天皇』、227頁。
 ㊺ 肥後和男著『天皇と国のあゆみ』、226～228頁。同編著『歴代天皇紀』、2～5頁。渡部昇一著『歴史の読み方』、52～54頁。
 ㊻ 肥後和男編著『歴代天皇紀』、2～5頁。
 ㊼ 松本清張「「万世一系」天皇制の研究」(『諸君』昭和53年1月号)。ジョン・W・ホール「君主制から封建制へ」(講座比較文化第6巻『日本人の社会』、220～223頁)。渡部昇一著『歴史の読み方』、51～52頁。
 ㊽ 渡部昇一著同上書。
 ㊾ 津田左右吉「学問の立場から見た現時の思想界」(『津田左右吉全集』第23巻、106～107頁)。尾鍋輝彦著『明治の光と影』〈20世紀4〉、4～8頁。勝部真長著『日本人の思想体験』、角川選書、昭和54年、212～217頁。
 ㊿ 勝部真長著『日本人の思想体験』、216～217頁。

- 60 中根千枝著『タテ社会の人間関係』、講談社現代新書、昭和42年。水野祐著『天皇家の秘密』、262～264頁。
- 61 水野祐著同上書。
- 62 肥後和男著『天皇と国のあゆみ』、225～228頁。和歌森太郎著『天皇制の歴史心理』、215～216頁。林健太郎著『歴史の精神』、150～151頁。勝部真長著『日本人の思想体験』、229頁。
- 63 肥後和男著『天皇と国のあゆみ』、225～226頁。
- 64 永原慶二著『日本封建社会論』、東京大学出版会、1955年、286～292頁。尾藤正英「近世史序説」(岩波講座『日本歴史9 近世1』、岩波書店、1975年、19頁)。豊田武著『日本の封建社会』、53～59頁。
- 65 豊田武著『日本の封建社会』、53～54頁。
- 66 石井繁郎著『日本国制史研究1』、235頁。
- 67 同上、235～236頁。
- 68 次の2つの記事によっている。

- ① 昭和50年9月、アメリカ『ニューズ・ウィーク』誌の東京支局長バーナード・クリッシャー氏とのご会見において(クリッシャー著『インタビュー 天皇から不破哲三まで』、サイマル出版、昭和52年、49～51頁)。

——皇室の伝統が2千年も続いていることには、なにか特別の要因があるとお考えでしょうか？

陛下「歴史を通じて、皇室はつねに国民の幸福を第一義に考えてきたからです」

——次代の天皇に、ご自身の意思どおりに責任を遂行できるよう、どんな助言をなさりたいですか？

陛下「皇太子には、彼なりの考えがあるでしょう。しかし皇室には、つねに国民の利益を考えて行動するという、長年にわたる伝統があります。ですから、皇太子も同じような態度をとるものと私は期待しています」

- ② 昭和52年8月宮内庁記者団とのご会見において(『朝日新聞』同月24日朝刊)。

——終戦のご聖断のとき、ポツダム宣言で政体が国民の自由な選択にまかされるなどの条件が付き、国体護持が問題になったときの陛下はポツダム宣言受諾を即座にご決断されたとうかがっておりますが。

陛下「国体というのは、日本の皇室は、昔から国民の信頼によって万世一系を保ってきたのであります。戦国時代の皇室が衰微したときの毛利元就、織田信長の武将が皇室にばく大な献上をしたなどにも示されており、皇室を尊崇していたのです。皇室もまた、国民をわが子と考えられてきたのであり、それが皇室の伝統であります。(その伝統に従って)わたしも即座に決断したのです」

——日本の皇室とヨーロッパ王室の違いは何だと思われませんか。

陛下「違いということは歴史と文化、歴史の構造、国民性の構造があるそのもとで違いが生じたと思いますが、国民が皇室を尊敬しているところは長く続くことは東西変わらないと私は思います」

- 60 津田左右吉著『日本の皇室』(『津田左右吉全集』第23巻、346頁)。
- 61 宮内庁書陵部編『花園天皇宸翰集』の「解題・釈文」、吉川弘文館、昭和52年。
- 62 肥後和男著『天皇と国のあゆみ』の「はじめに」。
- 63 坂本太郎「日本歴史と天皇」(別冊歴史読本『歴代天皇124代』)
- 64 同上。
- 65 村上兵衛「天皇制は何故に存続し得たのか」(『流動』1971年10月号)。

追記

本稿脱稿後、石井良助著『天皇一天皇の生成および不親政の伝統一』(山川出版社、昭和57年8月)が出版された。

それによれば、天皇の古来からの伝統として「不親政」とともに「刃に血ぬらざる」をあげ、それが天皇永続の原因にもなったとして、次のように述べている。「歴代の天皇はふつう戦争を好まれなかったことである。それだからこそ、天皇家は現在に至るまで栄えることができたのである」